
恋とは

中町悠太

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋とは

【Nコード】

N9260M

【作者名】

中町悠太

【あらすじ】

ごく普通の高校生こと俺、迎啓輔は

普通らしい普通の生活をしていた

二年の夏休みも終わり後半分の高校生活も変わらず過ごすのかと漠然と考えていた

しかし櫻井麻耶と出会い俺を待ち受けていたのは
えらく現実的な出来事だった

プロローグ 8月31日

「あーあぢい」

8月28日、俺、ムカイケイスケ迎啓輔はせつかくの夏休みだというのに暇を持て余していた

宿題はもうだいたい片づけたし（正解率はどうなのだろう、多分ひどいな）

実家にも帰ったし

バイトも今日はないし

と言うわけで何となく町を歩いている

「こうなると何で高校はじまんのが恋しくなんのかねえ」と無意味にぼやいてみる

「あれー？啓にいがいるー。どーしたの？」

と話してきたのは俺の幼なじみで一個下の早川花梨だハヤカワカリ

「どうしたも何も暇だからで歩いてるだけだ」

「えー？でも啓にいいつつも部屋で漫画読んでるじゃん」

「とりあえず啓にいをやめい。もう高一だろお前」

見たいな当たり障りのない話をして今日は別れた

その日の帰り

「結局何もなかったな」

色々やりたいことはあるが何をしよう

「・・・よし！恋愛しよう！」

まあむりだけだな

この時気づいてればよかったのかな

何か俺にとって予想外な出来事が起きるなんてなあ

第一話 9月1日

9月1日

特に何もなかった夏休みも終わり今日からまた学校が始まった
「くぁ…ねみい」

と欠伸を漏らすそのまま通学路を歩いていると

「よう！どーした迎」

俺の友人、相模凌也サガミリョウヤが話しかけてきた

「特に何も。お前は？」

「フッフッフ…なめるなよ、迎」

「あ？」

なんだこの不敵な笑みは…まさか

「特に何もない！」

「いばんな！」

とこんな日常をあと1年半は繰り返すんだろうなーと思いながら俺
の通う学校「私立 想見高校ソウケン」についた

いつものようにホームルームも終わり今日はこれで終わりだ

「相模ー帰ろうぜー」

「おー」

と言った感じで帰ろうとすると

「あ、あの…迎君…ちよつといいかな…」

女子が話しかけてきた。誰だっけこいつ

「おー、川相じゃん。どうしたの？」

相模がそうついた事で思い出した。うちのクラスの学級委員長、川カ
相友美ワイユミだ。茶色のショートヘアでちよつと小柄の女子。クラスで
の人気もそこそこあるらしい。クラスメイトを忘れちゃいかんよな
「あの…ちよつと手伝って欲しいことがあって」

「俺に？」

教室には俺、相模、川相以外にも何人かいるのだが。

「なるほど…」

不意に相模が呟いた

「どうした？相模」

「いーやなんにも」

と言って相模がにやりと笑う

「で、手伝うって何すりゃいいの？」

めんどくさいので話を戻すことにした

「あの・・・これ運ぶの手伝って欲しくて」

と言って川相が指した先にはかなりの資料などが置いてあった

「うわ・・・これを女子一人ってのは無理だろ」

と相模が呟く。確かになこれは無理だろと言う感じの量だ

「わかった。どこ運べばいいの？」

「えっと・・・多目的室に」

「了解。相模も手伝え」

俺がそう言うのと相模はぶつぶつ言いながらも付き合ってくれた

「あー疲れた」

「うるせーバカ」

手伝いも終わりカバンを取りに戻ってる最中である

この二言以外特に喋ることもなく無言で歩いている

ちなみに川相は終わったことを報告するとか言っでとっと職員室

へ行ってしまった

そのまま何となく歩いていると不意にタッタッタと走る音が聞こえ

「ぐお！」

「きゃ！」

俺にぶつかった

「やーごめんごめん。大丈夫？」

「いってえー」

ぶつかった相手を見るとそいつは長い黒髪のポニーテールで大きな

目でいかにも体育会系の女子だった。しかも美人
「じゃあ私急いでるから、じゃあね！」

と言っでとっくと去っでいっでしまった

「誰だ？あいつ」

「さあな」

その日は結局誰にも会わず帰宅、飯を食って寝た

第二話 9月2日

9月2日

もう学校がだるくなつてきながらも学校へと歩を進める

「啓にいいはよー!」

いきなり花梨が背中に抱きついてきた

「おまつちよいい加減それやめねえ?」

「やだよー」

こいつも彼氏とか作ればいいのにな。顔もいいし、なんつーか妹系
つて感じだし

「おーおー朝から熱いねえ」

俺と花梨がこうしていると相模が話しかけてくる

「何もしらん奴がいたら勘違いするようなことを言うな」

とまあこんなやり取りをしているうちに学校へ着いた

「あ、お…おはよう迎君」

教室にはいると川相が挨拶にきた

「おはよう」

「川相さーん、僕もいますけどー?」

「あ、おはよう相模君」

「俺ん時につつかえないのが何か傷つくな」

「なに言つてんだお前」

とまあばかみたいな会話をしていると

「で、あ、あの…昨日は二人ともありがとう」

とだけ言う顔と顔を赤くしてさっさとどこかに行ってしまった。どう
やらお礼を言いに来たらしい

「いーねーもてるヤツは」

と相模がニヤニヤしながら言っていたのでとりあえず殴っておくこ
とにした

そして昼休み

飯を食い終わった後何となく廊下をぶらぶらしていると、昨日俺とぶつかった女子がこっちに向かって歩いていてた。よく覚えてたな。俺の頭で

「あ！きみは！」

どうやらこっちに気づいたらしい

「いやー昨日はごめんねー。何せ急いでたもんで」

「いやいや、大丈夫だよ」

と言いながら制服のリボンを確認するどうやら俺と同じ二年らしいうちの制服は男子紺、女子は黒のブレザーでリボン、ネクタイは学年によって別れている。ちなみに俺の代はえんじ色のネクタイ・リボンで花梨の代（今の一年）は緑色である。ついでに言うと三年が青

「そう言えば君の名前は？ちゃんと名前ぐらい知らないかね」

「ああ、俺？迎啓輔」

「迎君ね。私は櫻井麻耶サクライマヤよろしく！あ、そーだ！今日うちの部試合するんだ。」

「へえ。何部？」

「バスケ部だよー。よかつたら見に来ない？」

「いいのか？俺はほぼ無関係だぞ」
なぜ誘う？

「いいよっ！観客が多いほど燃えるからね」

と言って櫻井は力こぶを作る（女子だからできるわけ無いが）

「マヤー、試合の準備ー」

櫻井の友達だろうか、女子が一人こちらに駆け寄ってきた

「あれ、お友達？まさか彼氏？」

女子がそう聞くと櫻井は顔を真っ赤にして

「ちちちちがうよ！何言ってるの？」

と否定していた。これ、漫画で見たことあるけど結構凹むな

「ふーん、まあいいか。麻耶、それよりも試合の準備！」

「ああ！ゴメン。忘れてたー」

「いいから早く！」

「はいはい。とゆーわけでもう行くね」

「おう。またな」

そう言うのと櫻井は「試合、見に来てね！」と言って、去ってしまった

「…言ってみつか」

放課後俺は相模とともに試合を見に行くことにした

そんなこんなで放課後になった

「女子バスケかーたのしみだぜ。な、迎」

そう言いながら相模と俺は体育館へ向かっている

「珍しいよなーお前がめんどくさそーな物に来るって」

「まあな。メリットを考えたら当然だぜ」

「メリット？」

そう聞くと相模はにやりと笑い

「そうだよ。女子のタンクトップに短パンなんてそうそう見れねーぜ？」

と言う…ここまで来ると尊敬するな

そんなこんなで体育館に着く

「もう始まってんのか？」

扉を開くと館内は異様な熱気に包まれていた

「おーすげーなー」

とりあえずギャラリー（二階みたいな所）に上がる

「で、えーと櫻井だっけ？はどこだ」

「えーと」

と言って探す

「いた。青の7番だ」

櫻井はコートでめまぐるしく走っていた

ポイントガード

近くにいたヤツに聞いた話だと櫻井はPGと言うポジションらしく
役目はボール運びをし味方にパスを出したり自分でシュートしたり
するらしい

状況は30対33、若干こつちがリードしている

そのまま何となく見ていて第3クォーターとやらに入っただけで事件
が起きた

「「あ！」」

俺と相模の声がかぶった

なんと相手チームの選手の肘が櫻井の目のあたりに直撃した
その瞬間審判が笛を吹き何だかよくわからない言葉を言う
しかし誰もそんなことは耳にしていなかった
なんと

櫻井のこめかみあたりから血が出ているのだ

全員が呆然とする中、俺と相模は下に降りていた

「大丈夫か！櫻井」

と言って駆け寄ろうとすると

「だれですか、あなたたち！」

とおそらく男子バスケット部のヤツ数名が俺と相模を止める。そりゃあ
部外者が入ってきてんだ。止めないほうがおかしい

「くそ・・・こーゆー行動は早いのお前ら」

と相模が皮肉っぽく言うが離そうとしない

「レフェリータイム！」

という審判の一声で何とか落ち着いていた空気になるが、俺達はその「
レフェリータイム」が何だか解りはしない

俺た相模が男子部員ともめている間に櫻井は保健室につれてかれ、
後で話を聞いた俺たちも保健室へと向かった

放課後

櫻井のケガを見た俺たちは止める男子部員を振り払い俺たちは保健室へと向かった

「櫻井！大丈夫か！？」

「おお！迎君！お見舞い？」

櫻井は思ったより元気そうだった

「初めまして！。俺、迎の友達の相模」

「相模君ね私は櫻井麻耶。よろしく！」

ソファーから降り相模と自己紹介を交わす。とてもケガ人の挨拶とは思えない

「そういえば先生は？」

「先生なら職員室行つたよ？」

櫻井がそういつた瞬間先生が入ってきた

「櫻井さん！勝手に動かないで！また血が出ちゃうから！」

「はい」

櫻井はそういつてソファーに戻る

「困ったわね・・・あ、君たち今日ヒマ？...ってヒマよね。こんな時間まで学校にいるんだから」

「うわひっでー」

そう言いながら胸を押さえる相模を無視し先生は話を進める

「ねえ、櫻井さんを家まで送ってくれないかしら」

「え？なんでですか？」

先生はため息をつくような感じで

「櫻井さんのご両親が今日は二人とも忙しいらしいのよ。でも櫻井さん、いつふらふらとどこかへ行っちゃうか不安でね」

と俺らに説明してくれた

それを一緒に聞いていた櫻井は「えへへ...」とぼつが悪そうに笑っている

「それはそうと、ケガはどうなんですか？」

相模が忘れかけていた事を確認するように聞く

「激しく動かなければ大丈夫よ」

と聞き俺はホツとする

「ま、そういう事ならいいですよ。櫻井、家、どこにあるか案内してくれ」

「はい」と言って三人で帰ろうとすると

ピンポンパンポーン

「えー二年Ｃ組相模凌也いるならすぐに進路指導室に来い。以上」
ピンポンパンポーン

とアナウンスが流れてきた

「やつべーあれ出すの忘れてた」

あれというのは多分昨日出すはずだった進路希望書だろう

しかもあれは生活指導の大神の声じゃなかったか？これは相模、死んだな

「とゆー訳で行ってくるわ。じゃ！」

相模はそう言うたとさっさと行ってしまった

相模が行ってしまったため俺と櫻井二人で下校だ

「いやーまさか監視がつくとは」

「帰り際に「絶対お願いね！」って念押されちゃったしなあ」

「そだね。ま、エスコートよろしく頼みます。王子様」

「それ、やめてくれないか」
なんか恥ずい

まあそこまで親しいわけでもない俺たちだ。そんなに会話が弾むことなく俺も見慣れた商店街へ入る。どうやら櫻井の帰り道らしいその商店街を抜けるまで何度もふらふらといなくなる櫻井を何度も捕まえた

「まったく…お前は子供か」

「いや〜目新しい物はいね」

と言いながら苦笑いをする櫻井

「あ、私この先だから、もう大丈夫！」

と櫻井が言ったのは商店街のすぐ近くにある住宅街だった。俺の家もこの近くにある

「だめだ」

「えゝケチゝ」

「先生に言われてんだ。この後お前になんか会ったら俺のせいになれる。こうなったら最後まで付き合うぞ」

さっきまでふくれていた櫻井だが「そう？」と聞いて俺がうなずくと笑顔に戻り

「では、よろしくお願いします。王子様」

「だからそれやめろ」

とこんなやり取りをする

今日はそのまま無事に櫻井を送り届け自宅に帰る事とした

歩いていると後ろから「啓にいゝ」と聞こえたので後ろを振り向くとズドツと鈍い音が…俺の顔からした

どうやら花梨が俺の顔にドロップキックをしたらしい

その瞬間「啓にい？啓にい？」と言う声が聞こえて俺の意識は落ちた

第三話 9月3日

「あーまだ痛えよ」

「ごめんって言ってるじゃん」

朝、俺は昨日花梨に蹴られた顔をさすりながら花梨と一緒に登校していた

昨日あの後どうなったかというところとわかりやすく言おう

そのまま朝まで気絶しっぱなしだ

今日の朝5時に起きとりあえず風呂に入って着替えた後、遅刻寸前でもないのにパンを加えて出た後花梨と出会った

俺が気絶した後どうしたのかと聞くとどうやら川相を呼んだらしくその川相が相模を呼んで三人で運んだらしい

「で、どうして蹴ったんだ」

俺がそう聞くと花梨はうつむき

「だって啓にいが女バスの試合見に体育館行ったって聞いたから体育館行ったらもういなくて、保健室行っただけ聞いたから保健室行ったらもう帰ったって言うんだもん…そしたら頭にホータイまいた女の子と一緒に帰ってて…」

と言っていた

「あいつは女バスにいる友人だ」

確かに夏休み前は相模と三人でよく帰っていたが…

どうやら悲しませてしまったらしい

「ま、今んと頃はやましいところはない」

「そうなの？」

涙目で聞いてきたので無言でうなずく。そうすると花梨はまだ目に涙を残しながら笑って

「よかった…」

と言った。

そのまま何となくピンク色の空気のまま歩いていると後ろから元気な声が聞こえた

「おーい、むつかいくーん」

「おう、櫻井」

「昨日はありがとね」

「いやいや」

とこんな会話をしていると相模が「いいよなーお前は」と言いながら合流してきた

そのあと川相が「みんな…おはよう…」と顔を赤らめながら合流してきた…なんてだ？

俺と花梨だけだったのが一瞬で五人の大所帯となる

さっきのピンク色はどこへやら、みんなで楽しく登校した

放課後いつものように帰りの準備をしていると「迎くーん」と声が聞こえた

「櫻井、部活はどうしたんだ？」

櫻井はエヘへと笑いながら

「なんかさ、ケガが治るまで来ちゃダメだった」

と言ったその後「だからさ」と続けて

「今日も一緒に帰って良い？」と言った

「ああ、別にいいぜ。でも同じクラスの友達いねーの？」

「いやー、みんなバスケットだからねー」

「なるほど」

俺はその一言で納得し相模を誘った

「相模、どーだ？」

そう聞くと相模は首を横に振った

「今日もまた進路指導室。早く決めろって大神がつるさくてさ」

というわけで二人で帰る事に

ちなみに今日は花梨と川相は部活だ

とゆーわけで、通学路

「あ、そうだ」

不意に櫻井が声を出した

「どうした？」

俺がそう聞く前にさっさとなぜか自販機により二本何か買ってきてそのうち一本を俺に渡してきた

「はい、昨日のお礼」

「あ、ああ、サンキュ」

と言って素直に受け取る

そのままジュースを飲みながら二人で何となく歩く

「あ、そうだ」

また不意に櫻井が声を上げた

「どうした？」

またどっか行くのかと思いきや今度は俺に向き直ってきた

櫻井は背が低い、確かだいたい148とかきいた気がする。その上二人の距離が近いため上目遣いで見てくる。正直、照れる

「私、迎君にお礼言わなくちゃ」

「お礼なら現在進行形でもらってるが」

右手に持つてるジュースを見せる

「うっん、それじゃなくてね…えと…一年前の事覚えてる？」

「いや、まったく」

皆目見当もつかん

「その時私、四、五人の怖い人に囲まれてて、それを迎君が助けてくれたの。迎君、すぐ行っちゃったけど」

「ああ、あれか」

すべて思い出した

あんどき俺は四、五人のちょっとやばげの男に囲まれている女子を助けたのだ

助けたと行っても持ってた缶ジュースの空き缶を思い切り投げたらいい具合に何人かに当たって気絶。一人残ったがそいつはさっさと

逃げてった。俺も何人かのした（ようなもの）のでさっさと逃げた

「助けたってほどの事じゃないだろ。たまたまだし」

「でも私はすごい嬉しかった。ありがと」

そう言くと櫻井は「それだけ！」と言って去ってしまった

どうしたんだろう

そのまま俺は何となく引っかかりを覚えたまま家に帰り眠りに落ちた

第四話 9月11日

日曜

櫻井のケガも治り数日たったある日の日曜

俺、花梨、櫻井、川相の四人は相模に呼び出されていた

川相と花梨は櫻井のケガが原因でそれぞれ知り合い、仲良くなっていた

今も三人で仲良く話していて俺は所在なさに立っている

相模、早く来てくれ

「わりーわりー、遅れた」

「「「遅いよー相模君（先輩）」」」

三人が見事にハモる

「いやー寝坊してなー」

と四人で話していて、俺はまた所在なさに突っ立っている・・・俺を呼んだ理由は？

「まあいこうぜ」

相模が俺たちを呼び出した理由はたまたま遊園地のチケットが五枚手に入ったので一緒にいかな？という話だ

「三人とも少し渋ってたんだけどなお前の名前出したら即OKしてくれただ。やっぱさきにお前にOKもらって良かったー」

これは相模のセリフだ。俺には後半の理由が全くわからん

とまあこんなメンバーで電車を乗り継ぎついたのは

日本では結構有名な有名で、最近ではテレビでデートスポットと称される大型遊園地だ。

「わー。やっぱこの遊園地大きいねー」

「そうですねー」

花梨（上）と川相（下）のなんだか気の抜けた感想を聞きながら俺たちは中へとはいる。

と言ってもだいぶ混んでたので入るのに一時間近くかったが

午後六時

「おーい、待てよー」

「もう無理だつて・・・」

と言う俺と相模をよそに女性陣は楽しそうにいろんな所へ走り回っている

「まだまだー!」

と言う櫻井がやけに印象的だった・・・とか言っている余裕はもう無い

「もー、啓にいても相模先輩もしょうがないな。じゃあ休憩も兼ねてこれはどう?」

そう言つて花梨が指したのはテレビなどでも良くバツゲームなどで使われるお化け屋敷だった

「ふえ・・・」

と川相が嫌がる

「あれ?川相先輩こういうの苦手?ならここで待ってていいよ」

花梨がそう言つと川相は安心したようで「ではここで待ってます」と言つて入り口近くのベンチを指した

「あ、そうだ、せっかく男子と女子が2:2だからさ、それぞれでぐつぱーしない?」

「お、いーねー」

花梨の発案に相模がすぐ賛同する。つくづく欲望に純粋なやつだ。

まあ俺と櫻井も特に反論する理由もないのでそうする事にした
結果

俺と櫻井 相模と花梨
となった

「じゃあいつてくるねー」

と花梨の気楽な声とともに二人は病院へと消えていった

「こわかつたー」

と花梨は半泣きの状態でそう言っていた。相模はというとなんだか
幸せそうだから放っておいた
「じゃあ行ってくるぜ」「いつてきまーす」と、俺らも挨拶をし中
へと入っていった

「うわー・・・さすがに怖いね」

「だな・・・結構雰囲気があるし」

中に入って数分、櫻井は俺の腕にしがみついていた。結構気分が出るね

とはいえこれは結構どころかなり怖い。これに比べりや普通のお
化け屋敷などかわいい物だ

「うおわ!」「きゃあ!」

いきなり来た幽霊みたいなのに俺と櫻井揃って声を上げてしまい、
櫻井はその場に座り込んでしまった

「お、おい! だいじょうぶか?」

「う、うん・・・腰抜けちゃって」

このままだとここから動けなさそうだな

「・・・しょ」

「え? 迎君! ?」

櫻井は驚いていた。それはそうだろう。いきなりお姫様抱っこなど
されたのだ

「ちよつと・・・ハズカシ・・・」

「でも、おんぶだと当たるぞ?」

「え?・・・あ・・・」

「ま、当たるほど無いか」

「うるさい!」

殴られる・・・反省

もう出口が近かったらしくそれから何も起きなかった

「おー帰ってきた帰ってきた・・・ておい!」

俺と櫻井が出てきて最初に聞いたのは相模のこのセリフだった

ちなみにその際川相と花梨は「いーなー」と言いながら櫻井を見ており、相模は俺をにらんでいた

午後八時

あのあとまたアトラクションを回ったので俺と相模はへとへとになった

その帰り電車の中で女性陣は疲れたのかグッスリ眠っていた

それを見た後俺らも寝てしまった

もちろん乗り過ぎなどはなかったが

家が別方向の相模と川相と別れ花梨も親が迎えに来ていたので俺と櫻井二人で帰っていた

「いやー楽しかったねー」

「そうだな」

実際俺にとってはとても有意義な一日となった

「あとさ・・・ありがとね？お化け屋敷の時」

「ああ、まあな・・・」

なんだか恥ずかしくなる

「あの・・・お礼と言っては全く違うと思うけど今日から私のこと麻耶って呼んで？」

「なんで？」

当然の疑問

「私正直言つと名字ってあまり好きじゃないんだよね。だから、名前で呼んで？」

「いいのか？」

「うん。私も君の事、名前で呼ぶからさ」

「じゃ・・・じゃあ・・・麻耶」

「なあに？啓輔君」

なんだかとても照れる。バカッフルみたいだな

「おーい麻耶ー」

「あ、親だ。じゃあね、啓輔君！」

「ああ、じゃあな、えと・・・麻耶」

何かカップルみたいな会話を終え麻耶は帰っていった

「さてと・・・俺も帰るか」

さすがに今日はドロップキックを食らう事もなく安心して家に帰った

第五話 9月12日

有意義だった休みも終わりいつもの生活が始まった

「よう、迎」

その日最初に話しかけてきたのは花梨ではなく相模であった

「よ」

一言かつ一文字でかえす

「けーいすつけくーん、おーはーよー!」

その次には麻耶が話しかけてきた

「よう」

こうしてなんだかよく分からない三人組ができあがった

そのまま他愛もない話をしながらいつしか学校に着き俺と相模のクラスへとはいる

「ちーす」「うーす」

誰も返さない。まああたりまえか

昼休み

さて今日も学食かなと席を立つと花梨が廊下で誰かを待っているのが見えた

「どうした、花梨」

と言いながら軽くチョップしてやる

「うにゃ! 啓にい」

と恨めしそうな目で見ている

「やつぽー! 啓輔くーん、お昼食べよ」

「昼飯か? 俺も混ぜてくれよ」

「あの・・・私も一緒にいいかな」

と麻耶、相模、川相の順で混ざり、いつしかいつもの仲良しグループとなった

この五人で昼飯を食べているときは家の事など忘れていられる・・・

家の事など・・・

放課後

いつものようになつた五人下校。分かれる順番は自動的に川相、相模、花梨、麻耶の順になる

花梨と麻耶は逆じゃないの？と言う疑問はすぐ解決できる。

俺は一回引越をしているため中学の時は花梨の家に近かったのだが今では花梨の家もそこそ遠い。

しかも引越と言っても学区は全然変わらなかった

「いやー、今日も疲れたねー」

どうやらバスケット部は今日はないらしく最終的に俺と一緒にになる

「そついや、国体予選は出るのか？」

前に麻耶から聞いた話だとバスケットには三つの大きな大会があるらしい

夏のインターハイ、秋の国体、冬の選抜

これが高校バスケット三大タイトルと言われているらしい

今は9月、インターハイもとくに終わり、練習中だとか

「んー国体予選は出ないかな。選抜予選には出ると思っけど」

「そうか・・・」

最近では麻耶とバスケットの話で、たまに盛り上がる

といつても部の話だが

「あ、もうここか、じゃあね！啓輔君」

「ああ、じゃあな」

と言つて別れる

「ふう、帰るか」

何となくそのまま寄り道もせず帰った

「ただいま」

物音一つしない

そんな俺一人しかない家

親父もお袋もない

そんな何もない空虚な家

それがここ

寝るか漫画読むかゲームするかだけの家

「・・・寝るか」

俺はそのまま眠りへ落ちた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9260m/>

恋とは

2010年11月14日01時41分発行